

王希奇「絵筆で人類史の記憶を描写する」

(中国電子報・搜狐 m.sohu.com 今日遼寧 2020-11-16) (吉尾寛 試訳)

王希奇:用畫筆抒寫人類歷史記憶 油畫『一九四六』王希奇繪

5年間の時間を経て、500人以上の人物、遼寧の画家王希奇は一幅の長さ20メートルに及び、高さ3メートルの大型油絵『一九四六』を用いて「大遣送(葫蘆島の大規模引き揚げ)」の歴史を語り、それはまた世界美術史上トップクラスに入るものであった。この時代に恥じない「世紀の作品」は、世界美術史に濃彩重墨の一筆を残した。

大型油絵『一九四六』が2015年に世に問うようになってから、世界の人々の幅広い注目を引き起こした。これまで招請されて日本において前後三回展示会が挙行され、大変多くの日本の芸術家や市民を鑑賞に誘い、その中には白髪蒼々の引き揚げ体験者、体験者の子孫、民衆や芸術界の方々が多数途切れなく続き、彼らは絵の中に自分或は家族の影を求め、熱い涙が目に溢れんばかりとなって次々流れ、帰るのを忘れ(るほどであった)。更に取り上げるに値するのは、既に96歳になった高齢の、その年引き揚げた人が絵画展を見終えた後、長年失語(症)を煩っていた彼女が思いもかけず奇跡的に口を開いて喋ることができるようになったことであり、これが直接人の心に働きかける芸術の力なのである。

王希奇、芸術家、魯迅美術学院學術委員会委員、繪画芸術学院教授、大学院指導教授、中国美術家協会会員。

長年来ずっと王希奇は、どのようにして絵画を用い人類の歴史の記憶を描写するかという研究に力を入れ、中国伝統の水墨画の中での「韻」を用いて人類の脳の中での「記憶」の像を表現し、併せて巨大サイズの作品を用いて記憶の「場」を配置することを‘実験’した。[その結果、]作品は芸術と歴史の偉力、重大なる歴史事件を通して、突出して優れた芸術家の人間性と生命に対する温かな眼差し、および芸術家の歴史と現実に対する責任・任務が表現された。代表作には『長征』、『官渡之戦』、『一九四六』、『猶太人(ユダヤ人)』、『美軍戦俘營』等。

王希奇の創作する作品は、多く世界(国際)史の題材を主とし、その画風は重々しく、堂々とし、沈鬱、「蘊藉風骨」(奥行きのある風格)、国家を超越し、人種を超越し、正義と悪を超越し、敵味方等の伝統的的二元論の対立的思惟を超越する。「悲天憫人」の想いで極限下の人の生命の状態に注目し、国際派の新現実主義派の画家という名誉を受けた。

その中、『一九四六』系の作品は既に3年連続で日本から招請され、東京、京都府舞鶴、仙台で展示され、国内外で大変大きな反響をよんだ。作品は何回か国家級、省(日本の県)

レベルの奨励賞を獲得し、作品の一部は中国美術館、中国軍事博物館等国内外の機関に収蔵されている。

志すところ: 絵は中国人の高貴な徳行と善良を表す

70 年前のこの「葫芦島大遣返」は、世界史上規模の最たるものとして歴史書に載せられ、これは戦争から平和への重大なる転換であり、更には中国人民のヒューマニズムとして深く心に刻まれるべきものである。

1945 年、日本敗戦(投降)後、中国の地には一大事が起きた: 仁愛ある中国人民は大きな愛の手を差し伸べ、大量の人力、物力および財力を投入し、1946 年 5 月から 1948 年 9 月にかけて、前後 105 万人余りの日本の一般人(僑民)と俘虜が葫芦島から帰国した。[それは]歴史上「葫芦島百萬日僑俘大遣返(葫芦島百万の居留民・俘虜の大規模引き揚げ)」と称された。

「大遣返」は中日関係史の重要な事件であり、日本と中国のこの時期の歴史において全て叙述されているものであるが、どのように絵画の形式を通してこの時期の歴史を描いたのであろうか。

魯迅美術学院教授王希奇は人類愛と文明史の高みに立って、一人の芸術家の責任感と使命感によってこの時期の歴史と群像を描いた。彼は無数の新聞写真や歴史的遺品にフォーカスを合わせることを通して深く研究を進め、事件全体の焦点にあたる部分を把握し、その並み外れた視覚手法を用いて、複雑極める歴史事件を厳かに、高度に明晰に描き、中華民族の博愛、善良と崇高を表現した。

王希奇は言う: 悲しみ哀れむべき心情と人道主義的思いやり、これが『一九四六』創作の理念とテーマである。5 年来、心静かに事を為し、一幅の画を描いた。これが一芸術家の得がたい品格である。王希奇は成し遂げ、国家や民族に対して意義ある事である。

この油絵の創作の初志に話題が行くと、毅然とした顔で王希奇は言った: 自分は錦州で生まれ、小さい時から年輩者がその年に日本居留民俘虜を帰国(引き揚げ)させる事を話すのを聞いたことがあった。述べられた事は零細で断片的なものであったが、彼の少年の時の特殊な記憶となった。あつという間に半世紀以上経ったが、それでもこの時期の歴史は終始彼の記憶の中から消し去られることはなく、絵筆でこの歴史の瞬間を再現することは彼の宿願となった。

2010 年、彼は日本人居留民・俘虜が送還される一枚の古い写真を見るにいたり、[また]写真には遺骨箱を抱いた「少年」がおり、茫然と又同情の念を引き起こす二つの眼が深く彼を感動させた。彼の眼がその子供の眼に触れるに至った時、彼は思った: この子は侵略者の子供であるが、どうしようもなく孤独であり、彼は何を行っているのか? 子供の身にどのような事が起こったのか? これらの疑問を持ちながら、王希奇は資料を収集し始めた。

5年の間、王希奇は一年半の時間を使って資料を収集し、歴史研究を行い、幾度か日本に赴いて「大遣返」（「引き揚げ」）体験者（当事者）を訪ね、訪問と資料収集が深まるにつれて、王希奇は、この時期の歴史が既に徐々に薄らぎ忘れられつつあり、とりわけこの重大歴史事件を表す作品は非常に少なく、もし掘り下げて映し出さなければ、永久的に埋没するかもしれないと確信した。

後の三年半の間に、王希奇は身も心も『一九四六』の創作に投じた。創作の過程の中で、王希奇は一途に絵画の中を歩み、一人一人の引き揚げ者との交流の中で、彼らの複雑な感情、ふらつく足取りが体現するものから、抑圧と魂への接触を再認識し、[そのため]絵の表面以外からも、中国人の高貴な徳行と善良が映し出された。

王希奇は言う：「古から今に至るまで、戦争には真の意味での勝者は無く、人民は往々最大の被害者である。私が描いた「葫芦島大遣返」は、中国人の徳行の一側面を表すものである。戦後の中国のそのような貧困の時期において、ただ日本人居留民と俘虜を生きながら（活着）帰国させただけでなく、自身飢えているのに食糧を節約し彼らを食べさせた。私は曾て日本人に尋ねたことがある、もし歴史が逆転してきたならば、あなたたちは中国人のこのようなことができますか？彼らはおそらくできないだろうと言った。あるフランスのプロデューサーが私の収集した写真資料を研究したことがあり、その複雑な心情について私にこのように言った：あなたが史料に基づき描いたこれらの日本人の中の三分の一は、人民を殺害した者、人を殺したことの有る者であるが、あなたたち中国人は解放した、これは正にあなたたち中国人の善良[を表すもの]である。」

……………(中略)……………

この大型の作品は、単にインスピレーションによるというものではない。この絵を創作した1200日以上の中で、王希奇は、毎日研究して絵画技術を用いて適切に人物を描写し、別に、自己の情緒に対して調整と制御を進め、画面に全体に対するコントロールを行い、さらには一定した根気と決意を堅持していこうとした。この作品は毎日ブルドーザーによって絶えず挽かれているようなもので、描き直したものをつぶしては書き直した再度つぶす、描いていったものの一筆一筆が生命であることを最後に発見した。

このゆっくりとした長い創作過程は一種のいじめ？（煎熬）であった。王希奇は言う：「創作する過程の中で、甚だしくは一時期[活動を]放棄しようとした。大きな自己矛盾を抱えた時もあったがやはり継続しようとした、例えば有る時この絵が干からびて書き直そうと思ったが、上手く直せなければこの一年無駄に描いたことになることを恐れた。このように私はどうすればよいか非常に長く迷い、十数日「気」を身体の中の一点に集中させた。かくて状態最上の段階を選んで、連続三日書き直して、その大きな絵の場で行ったり来たりして調整し、描き直してはまた描き直した。絵の一筆一筆が他の人によって代わってもらえるものではなく、全て自分の力自分の行為によるものであり、一筆ごと、人物一人一人、場面場面一つ一つが全て自分の頭の中にあるもので、他人が取って代わられるものでない。」

王希奇は言う：「その実、全創作過程で自分も暗中模索し、感覚に従って動いたが、自分

のこの種の模索、この種の試みは非常に長い時間の調整を必要とするものであり、時に絵の隅の小さな手直しのため行ったり来たりして一箇月の時間がかかった。だからこの作品の創作が実際測りがたく実に大きい。なぜならこの創作は写真のままに描いていき、写真モデルのままに描いていくのではないからで、[逆にそうならば]それは唯の技術面の簡単な素描描写に過ぎず、絶対に血有り肉有る生き活きとした生命の描写ではない。自分は歴史に基づいて創作を進める者であり、創作の過程での種々の困難は、最後にこの作品に一種の悲劇的悲壯感を具えさせた。『一九四六』は二種の色を用いているだけで、一つは黒色、一つは黄色である。王希奇は言う：「黒い土地は東北を代表し、遼寧西部の葫蘆島は黄色土地であり、私は二種類の土地の色を用いて中国を体現した。」

王希奇は非常に多く国画の技法を倣い、壁画形式を用いて主題を展開し、且つ「蛍光虫」式の用光を独自に作り、表現したい一人の人物は全て自身の光を具える。画面全体は平らであるが、細部は立体であり、[こうした]中国水墨の人物画と西洋の油絵との完全な融合は、人に最も直観的な感受性を与え、人を震撼させる。